

人文学部創立40周年記念事業

2017(平成29)年7月8日(土) 10:00~12:20 札幌学院大学 SGUホール

学生アナウンス:ただ今より、人文学部創立40周年記念事業、雨宮処凛さんと、人間の生命と尊厳について考える対話集会を開催いたします。はじめに石川千温(いしかわ ちはる)副学長より、開会のご挨拶がございます。

副学長:みなさま、おはようございます。本日は、お暑い中、多数、人文学部40周年記念講演会にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。本来であれば、学長の鶴丸が、みなさまに直々にご挨拶するところなんですけれども、本日所用がございまして、わたくし副学長の石川が、最初のご挨拶をさせていただきます。

札幌学院大学、1946年中島公園のそば、札幌文科専門学院、当時は専門学校ですけれど、そこに終戦を迎えて戦地から引き揚げてきた若者たちが、自分たちの勉強の場がほしいということで、札幌の中島公園横の消防庁舎の2階を借りて、大学の礎を作り始めました。1968年、この札幌の隣接地であります江別市の大森、この場所に大学、札幌商科大学を開設いたします。それが、9年後1977年、人文学部人間科学科、英語英米文学科、二学科の構成で人文学部を開設します。それから40年経ちました。

人文学部の、その40年の生い立ちについては、後ほど岡崎人文学部長からご紹介があると思いますので、そちらの紹介は、学部長にお任せして、わたしは今日、こういう記念の講演に急遽、挨拶をするということで、いろいろ考え巡らせていました。何を話そうか思った次第なんですけど、本学の理念の中に、自律、人権、協働、共生という4つの言葉を掲げております。今日の話はおそらく、人権、という話である。

私は、こういった専門家ではないんです。詳しいことは、なかなか述べられない部分もありますけれども、わたしの領域の近いところでお話をすると、今、日本の置かれている様々な状況、気候変動を含め、政治の状況、経済の状況、こういったことを考えますと、弱者、こういう言葉が適切かどうかわかりませんが、普段の生き方に困難を抱えている者、こういった者にとって、日本が生きにくいという状況にある。これはみなさんの一致した考えであると思います。

わたしは、その中で、日本の、現実に不満として思っているのは、メディアの役割でございます。メディア、ジャーナリズム、こういったものが、日本では機能していないのではないかと。本来、メディアというのは、弱者に寄り添って、権力に抗して、支え、代弁する、そういった役割が必要なんです。日本には、その部分がどうも成立していない。むしろ、権力を持った者を忖度して、まあ、流行りの言葉使います。忖度しているんです。権力に寄り添ってしまっている。この考えをやっぱ改めるべきではないかと、わたしは考えるんです。

そういった意味で、今日お招きした、雨宮処凛さん、自分の立場をしっかりとわきまえて、メディアジャーナリズムで生きる方です。雨宮さんは、この弱者に寄り添う、弱者の言葉を代弁する、こういったことを普段から体現されている方だなと、私は考えております。今日は、そういった、雨宮さんを迎えて、また、私共の人文学部を卒業した学生、今は、社会人で立派にやっている、元学生たちとの対話集会という中で、我々の、そして一般市民の役割というのをもう一度再確認したいと考えております。2時間ぐらい、非常に短い時間ではございますが、みなさまと一緒に、この問題に関して考える場になれば幸いです。簡単ではございますが、わたくしからの挨拶とさせていただきます。本日は、よろしく願いいたします。

(拍手)

学生アナウンス:ありがとうございました。次に、岡崎清(おかざき きよし)人文学部長よりご挨拶がございます。

学部長:みなさん、おはようございます。人文学部を代表いたしまして、一言ご挨拶させていただきます。

ご承知のように本日は、対話集会でございます。この対話集会というのは、この人文学部公開講座「人間論特殊講義」の今回の責任者の新田先生からご提案を頂戴しました。とかく、記念事業と申しますと、何かこう、ご高説を我々が賜るみたいなイメージがございますが、わたくしたちは、そうではなく、登壇する方々、そして、オーディエンスの方々と共に今回のこのテーマを、みなさんと一緒に考えていきたいと存じます。

人文学部は、1977年、副学長にご紹介されましたが、学部として2学科で開設いたしました。その後、2000年に大学院臨床心理学研究科を立ち上げ、翌年、臨床心理学科、3学科、1大学院の体制をとり、2006年は、こども発達学科を開設し、4学科体制となりました。来年の4月からは、臨床心理学科が心理学部として独立いたします。

今回の、この対話集会であります。人文学部の理念に沿ったものと確信しております。副学長も紹介されましたが、本学の理念、自律であります。そして人権がございます。3つ目が共生であります。最後に協働という言葉がございます。人文学部も、この4つの理念に沿って教育、研究活動を展開しております。わたくしが、考え、感じることは、副学長は弱者の視点をお話しされましたが、生きづらさというのは、もう隅々にまで蔓延しているような気がいたします。比較社会、管理社会、あるいは監視社会と言ってもいいかもしれません。わたくしたちが、どうして、今、この生きづらい世の中になってしまったのか、これは、わたくし、みなさんと共に考えたいと思います。

今日は、少ない時間ではあります。参加者のみなさまと、そして雨宮さん、登壇者の方々と共に人間の生命と尊厳について考えるというテーマで時間を過ごさせていただければと思います。よろしくお願いたします。

学生アナウンス：ありがとうございました。続いて、本日の企画者である人文学部人間科学科新田雅子准教授より、本日の対話集会の趣旨説明と、登壇者のご紹介をいただきます

新田：こんにちは。今日は、暑い中大勢お集まりいただきまして、どうもありがとうございます。私は、人間科学科で高齢者福祉論を担当しております新田と申します。今回の公開講座、それから対話集会を企画させていただいた者です。

1977年に創設された人文学部人間科学科では、創設当初から、市民向けの公開講座をずっと続けてまいりました。その初期の試みは、20年あまり続けられました「北海道文化論」です。2002年度からは科目名を「人間論特殊講義」ということに変更いたしまして、幅広いテーマを設定して、学外講師をお招きして、学生と市民が共に学び合う講座を継続しております。私は2003年、いまから15年前に人間科学科に着任したんですけれども、着任した翌年にコーディネータを任されまして、「ケア」をテーマで、この公開講座を企画させていただきました。持ち回りで企画の担当が回ってくるんですけれども、めぐりめぐって2017年度、今年は再び、コーディネイトを担当させていただくことになりました。

ちょっと本題に入る前に、10分程度前置きの話をさせていただきたいと思っています。

私は2016年7月26日に相模原市のやまゆり園で起きたあの殺傷事件のことがずっと、胸のあたりに引っかかっていました。開催がちょうど事件の1年後のこの時期になりますので、相模原事件から1年ということで、そういうテーマでやりたいというふうに、恐る恐る周りの先生に相談してみました。すると、みなさん本当に、私もあの事件のことをちゃんと考える機会がほしかった、ぜひやらせてくださいというふうに、すぐ、ご即答いただきまして、本当にこの大学はいい先生がたくさんいて、この大学にいてよかったなと思励まされたんですけれども、それで本日お配りしましたような、白黒両面のチラシを同封してはいますが、こんなようなラインナップが、ほんとうにすんなりと、決まりました。

この公開講座の検討を進めるなかで、来年は創設40周年なので、周年事業ができますよというふうに理事会のほうからお話をいただきまして、じゃあこの講座の最後に、大学から少しお金を出してもらって、もっと広く一般の方も参加していただけるようなイベントを企画して、この問題についてもっと考えて議論したり共有したりしたいというふうに思いました。

それで、ハフィントンポストという、インターネットのニュースメディアに、事件に関する印象深いエッセイを雨宮処凛さんが書いておられましたので、恐る恐る雨宮さんにメールをしたところ、その日の夕方には「日程空いています、呼んでいただけてうれしいです」というメールがすぐに届きまして、私はリビングで、ノートパソコンで、そのメールをチェックしてはいたんですけど、私は思わず「やったー」と叫んで、子どもたちに「かあちゃんどうしたどうした」とびっくりされました。それで雨宮さんをお招きできることになりました。

さて、テーマに関わる事件のことなんですけど、みなさんはどんな風にご記憶なさってらっしゃいますでしょうか。私は朝起きてリビングに行ったら夫が、神奈川のほうで何かたくさん人が殺される事件があったようだ、それも犯人はひとりみたいだよというふうに言っていてですね、日本でもとうとう銃乱射事件が起きたのかと思いました。散弾銃でもなければ、ひとりの人間が一晩のうちに何十人もの人を、傷つけたり殺したりするってことは考えにくいので。いや、刃物らしい、相手は、抵抗できない寝たきりの人だということがわかって、すぐに感じたのは、こんなことは今までなかった、初めての恐ろしい事件だ、というふうに思いました。それから一方で、なぜか、ああやっぱり、こういうことが起きてしまったかというふうに感じた自分もいました。こんなことが、近いうちに起きるかもしれない、思っていたような気がしたわけです。

あの事件はテロリズムと言ってもいいと思います。ある種の、ばかげた信条に基づいた大量虐殺でした。だからテロと言ってもいいと思います。で、それは、無差別殺傷ではないんですね。無差別どころか、選んで殺しているんですね。このことが、例えば2008年の秋葉原の通り魔事件とは少し違うところです。選ばれた人というのは、重度の障がい者でした。そういう人がたくさん集められて、敢えて集められて、と言いますが、そういう施設が、現場でした。犯人にとっては、一度に大勢の人を抹殺できるような、ジェノサイドを可能にするような装置だったわけですね。

もうひとつ、これは事件の後徐々に問題化したことですが、大変重い事実として、被害者の名前が公表されていないということです。これが、公開講座の中で望月先生もおっしゃっていたんですが、大阪の池田小事件とは大きく違うところです。今回の被害者は氏名が匿名化されています。それは、遺族の意思などいろいろなことが要素となっていますけれども、全く何の罪もなく、突然命を奪われた方々の名前が呼ばれないということは、被害者の顔かたちが見えないということは、これは異様なことだと思います。しかしそうした異様な状況をつくりだしているのが日本の今の社会であって、やはり、と私が思ってしまったのは、そういう社会の雰囲気というか、優生思想が実践されることを後押ししてしまうような、そういう嫌な流れが、今の日本の世の中にあるからだと思います。つまり、重度の障がい者とか、難病の方とか、心身機能の低下が著しい高齢者、そういう状態にある人を「無価値」であるとか「無用」であるというふうに判断して排除したり傷つけたりするような、そういう流れがあります。

私は高齢者福祉が専門ですが、2009年に群馬県渋川という所で、無届老人ホーム「たまゆら」というところで火災がありまして、10名の方が亡くなりました。そのうちの6名は、渋川とは何の縁もゆかりもない東京都墨田区の生活保護受給者でした。この方々の遺骨は、引き取りに来られる方がなくて、2年くらい役場に安置されていたということです。この、名前を呼ばれることのない命は、亡くなった後も、おそらく亡くなる前も、いつの頃からか、社会においては、名前を呼ばれなかったのだと思います。

ごく限られた家族や、社会から隔絶した施設のなかでしか、名前を呼ばれない人たちの「生きる意味」、もう一度言いますが、ごく限られた家族や、社会から隔絶した施設のなかでしか、名前を呼ばれない人たちの「生きる意味」、これを、見方によってはあの事件の犯人は、彼なりに考えた結果として、実行したと思

う。きわめて独善的な行動ですが、狂気とは言い切れない感じがするのは、私たちのなかに、今しがた私が申し上げたような発想がありはしないか、と思うからです。だから、公開講座のなかで藤野先生もおっしゃっていたんですけれども、犯人と私たちとは、どこか地続きだという感触、非常に居心地が悪い感覚も、私たちにはあります。

それからやはり公開講座のなかで安積遊歩さんがおっしゃっていたのですが、あの事件で、ご自身のよう障がい当事者は「殺されるかもしれないという恐怖」を、これはもう切実に感じた。そしておそらくそうではないいわゆる健常者は、「殺す側に立つかもしれない、立っているかもしれないという恐怖」を感じたでしょう、とおっしゃいました。まったくその通りなんです。

あの事件が起きた時には、実は前期の授業が終わってしまっていて、試験期間になって、学生さんたちとちゃんと話し合うことができなかつたということも私の中でずっと引っかかっていた。私のなかで、もつとあの事件を通して、人間の生命と尊厳について考えなければならないという思いがあって、公開講座を企画したわけです。

そして今年度前期科目として、たくさん先生方や事務職員の方々の協力を得て、5月の13日から7週にわたって、毎週土曜日午前中2コマ、これは、学生さん、起きるの大変だったと思いますけれども、さまざまな角度から考えてまいりました。その内容をレジュメにしたものを、本日の配布資料として、わたしがまとめたものなんですけれども、お配りしておりますので、これまでの内容がどのようなものだったか、後ほどご覧いただければと思います。

そして、今日はこの公開講座の最終回として、また人文学部40周年記念事業として、今申し上げましたような問題状況を共有するとともに、これからの私たちの進むべき道すじや、私たちにできることは何なのかを、考えていきたいと思ひます。これまで連続講座を受講されてきた学生さんと一般の受講生の方約80名がおられますけれども、それ以外の、今日初めていらした方も、もちろん一緒に同じようにご参加できる内容ですのでご安心ください。

ということで、本日は作家であり活動家である雨宮処凜さんをお迎えするとともに、人文学部の卒業生でありさまざまな経験や活動をなさっている若者3名にも登壇いただきまして、対話を深めてまいりたいと思ひます。これから約2時間、お付き合いいただければと思います。よろしくお願ひいたします。

(拍手)

新田: ということで、まず、ご登壇いただきますけれども、2008年に人文学部臨床心理学科を卒業されて、現在札幌市内の社会福祉法人で相談員をなさっている登り口倫子さんです。

(拍手)

次に、登り口さんと同じく2008年に、人文学部人間科学科を卒業され、現在釧路協立病院で医療ソーシャルワーカーとして活躍されている宮本真希さんです。

(拍手)

そして、この春に、人間科学科を卒業し、現在研究生という立場で様々な活動をなさっている二本松一将さんです。

(拍手)

最後に、今日お会いできるのを、私たち大変楽しみにしておりました、雨宮処凜さんです。

(拍手)

みなさんこれから2時間という短い時間ですけれども、どうぞよろしくお願いいたします。

それで、このあとの進め方なんですけれども、これから登壇者それぞれに、ちょっと長めの自己紹介というのをさせていただきます。順番に、登り口さん、宮本さん、二本松君、それから雨宮さんのご経歴や、いまど

んなご活動をなさっているのか、今日ご参加の皆さんにぜひ知っていただきたいと思います。そして雨宮さんには、自己紹介のあと、引き続き、相模原事件を受けてお考えになったことや、それを踏まえての現在の活動について、お話を展開していただきたいと思っています。

一方的にお話しするいわゆる「講演」スタイルではなく、やり取りしながらお話ししたいという、これは雨宮さんのご希望でもあったんですけれども、私たちもそのように進めていただくということで、時々このお三方や私のほうから質問等織り交ぜながら、だいたい11時15分くらいまで、雨宮さんのお話を中心に進めていきます。その後、10分間の休憩をとります。そして11時半頃から雨宮さんを含めた登壇者同士での質疑応答と、その後、最後30分程度、会場の方々との質疑応答を考えています。そのようなかたちで、よろしくお願いいたします。

それでは登り口さんから、自己紹介のほうをお願いいたします。

登り口：みなさん、おはようございます。わたくしは、先程ご紹介いただきました登り口倫子と申します。2008年に人文学部臨床心理学科を卒業しまして、その後、社会福祉士の資格を取り、現在は、「社会福祉法人あむ」という所で障がいのある方をご対象にした相談の仕事をさせていただいています。また、これまでずっと10年ほど講演活動をしておりまして、10代の学生や医療、福祉の勉強をしている学生、最近は福祉の支援に携わっている方々に障がい理解を広める講演活動をしています。

わたくし個人のことをお話ししますと、わたくしは生まれつき脳性麻痺という障がいがあり、車いすを利用しながら32年間生きてきました。日常生活のほとんどに介助の必要があり、人による介助がなければ、お手洗いや、入浴、着替えやベッドに寝たり、それから、ベッドから起きたりなどの、いろいろなことを自分ですることができません。ですが、わたしはヘルパーさんを自分でコーディネイトしながら、ひとり暮らしをしていますし、友人とお酒を飲みに行ったり、毎年、チェアスキーに行ったり、また道内や海外などいろいろな場所に旅行に行くことがあります。

頭に、「ですが」とつけたのは、10代の頃より養護学校や病院などで生活していた私は、当時、今の自分の姿を想像できなかったからです。リハビリをしながら、学校に通って自分で何でもひとりできないといけないと思っていました。また、介助が必要だと、施設などの特定の場所で職員の人に見守られてしか生きていけないんだと思っていました。つまり自分は、障がい、自分で背負っていく荷物であり、それを自分で克服して、人の手を借りずに生きられるようになるまで、街に普通に出入れる生活を送れるとは自分では思っていなかったのです。

そして障がいという状況は、他の人にはない、まあ、このような私の絵、描いたんですけれども、一般の人にはない特別でかわいそうな人なんだという、いろいろなメッセージというか、自分が人の言葉を聞いて思わされて生きてきたように思います。

今では、社会人になって、ようやくたくさんの人と出会う中で、考え方が少しずつ変わっていきました。人の手を借りることや、できないことを、どうしたらできるのかという発想で考えるということ。そして、ずっと右肩上がりでがんばらなければだめなんではなく、あきらめることや、しんどいと思うことも、それをしんどいと言えるということが大切なだと今は、確信しています。みなさんが見ているイラストの状況は、わたくし個人の問題とも思えますが、それは、みなさんが生きている社会の中から出てきた言葉だと思いますので、それは、みなさん方の広い意味での問題だと思っています。

障がい理解を広めている活動をしていながら、それが社会の中にある自己責任を強制する習慣に対してや、みんなが生きやすいように社会を変えていこうよ、というメッセージを与えていく活動を私はしていると思っています。バリアがあつたりしんどかつたりするときに、できるだけ楽になる方法を建設的に話し合う場が必要だと感じてきています。今日は楽しみにして参りました。本日はよろしくお願いいたします。

(拍手)

新田:はい、ありがとうございます。では次に、宮本さんより自己紹介をお願いします。

宮本:ただいまご紹介にあずかりました宮本と申します。私は2008年に人文学部を卒業しまして、現在釧路にあります釧路協立病院で医療相談室の相談員として働いています。簡単ではありますが、私の自己紹介をさせていただきたいと思います。

私は道東にあります釧路で生まれまして、妹と二人姉妹(きょうだい)でずっと育ってきました。両親が医療関係の仕事をしていたのと、祖母が難病の方々の会の活動を、若い頃から関節リュウマチがあったので、厚岸・浜中支部の支部長とかをしながらいるというような家庭環境の中で育ってきました。なので、なんとなく自分の中では、医療関係の仕事に就くのかなってというのが、小さい頃からあったように思っています。

高校生までは釧路で過ごしまして、大学に上がるのに、札幌学院大学に入るのに、こちらの方に出て来ています。釧路からだ札幌は憧れの土地で、憧れのひとり暮らしというところで、割と周りの友達もみんな行くので、当たり前にも自分も行くのかなという形で出て来ていたのが、始まりだったかなと思います。

大学に入ってから、2年間福祉系のゼミでずっと学んできて、最後は新田先生のゼミで卒業しています。この写真は、学生時代にボランティアに行っていたNPO法人の方から、江別のほうでも24時間テレビのチャリティイベントやらないかっていうのを、友達と一緒にですね、声をかけていただいたので、なんとなく、いろいろな思いがあってというよりは、学生のうちにしかできないことを最後、4年生の時にやろうという形で、仲のいい友達を集め、その中で、さらに後輩たちにも声をかけながら、人を集めてやってきたということがありました。そのほかにもですね、ボランティアは、私あまりバイトとかをしていなかったもので、「暇でしょ」って言われて、いろいろな人に声をかけてもらうことがあったので、いろいろな所に行っていました。

その中で、ちょっと顔を出せないんですけど、知的障がいのある女の子と、放課後、障がいがある子たちが集まって来る場所でボランティアをしていて、その人との出会いが、私の中では結構大きくて、知的障がいがあるので、言語もなくて、「あー」とか、「うー」とかっていうことぐらいしか、彼女は発することができないんですけど、あと、結構人を叩いちゃったりとか、自分自身を叩いちゃったりってことが多い子だったので、初めて関わったとき、私は結構、ちょっと警戒するとか、怖いかなという気持ちもありながら、ずっと関わってきたんですが、どうやら私のこと、すごく気に入ってくれて、段々ちょっと仲良くなっていったんですけど、ある時、ちょっと落ち込んでいたときに、すごく彼女が、こう、私の肩を抱いて励ましてくれるようなことがあって、こう、なんか言葉じゃなくても通じ合えることもあるんだなっていうのは、すごく感じたのと、なにかその中で障がいのある人と関わっていうところでのハードルがとて下ったのは、彼女のおかげだということ、経験の中ではありました。

その後ですね、その経験はあったのと、ほかにもいろいろな所で障がい関係にかかわって、実は私も以前、登り口さんが働いている「社会福祉法人あむ」で働いていました。その当時の、今の所長が、この大学の講義で外部講師として来ていた縁もありまして、卒業してそこに就職し、相談支援事業所、札幌市の委託を受けて、障がいを持つ方の相談支援事業所で、8年間働いていました。

この写真はですね、私が昨年3月まで働いて、辞めて釧路に帰る時に、いろいろな事業所の方たちが見送りに来てくれたときの写真で、8年間相談支援事業をやってきた中で、出会いというのがここに凝縮されています。なので、ずっと今でも私の支えになっている写真なので、ちょっと今回使わせていただいています。相談支援ということをしている中で、たくさんの人たちと繋がらないと、地域で暮らす障がいの人たちを支えていくってことはとても難しいですし、相談支援って間接的な仕事なので、日々支えてくれるのは関わってくれている方々というところで、自分ひとりの力では、できることって限られているなということを感じながら、ずっと働いてきていました。

そのあとに釧路に戻るようになったのは、父親が癌になりまして、最後まで自宅で過ごしたいという希望があったので、そこを母親ひとりで見ていくのは大変なので、私も帰ろうかなというのと、「ちょうど30歳だし」

とか「転職も考えたいな」みたいなところもあったので、まあ思い切って、こういうタイミングかなというところで辞めて釧路に帰って暮らしています。その時に、今の働いている職場から、訪問診療ですとか訪問看護とか、あと、ケアマネージャーさんとか、在宅の支援で入っていただくような縁もあったりして、やっぱり私は相談支援の仕事がすごくしたいなというところを感じたので、医療ソーシャルワーカーとして働くことになりました。

卒業してからも、ご縁があって、こういう機会に声をかけていただけたということは、とてもありがたいことだなと思っていますし、一緒に登壇している登り口さんも同級生で、なにかずっと、縁がいろいろな場所でお会いする縁が多々あって、そういう方々と雨宮さんと共にステージ上に上がらせていただいて、いろいろお話をさせていただく機会があるということは、とてもうれしく思っています。なので、今日は楽しみにしていましたので、どうぞよろしくをお願いします。

(拍手)

二本松:はい、二本松一将といいます。僕は、1994年7月に生まれました。今月です。東京都江戸川区生まれで、18歳までは東京にいて、大学進学をきっかけに北海道に来ました。僕は生まれたときから、母親はずっと強迫神経症とパニック障がいがあって、多重人格を持っていました。なので、小学校の頃から家族内でよくトラブルが発生していて、ちっちゃい頃から母親の気分をうかがうような生活をしていました。そして、高校生の16歳の誕生日の日に、両親が離婚することになり、半年後に、その両親は違う人と再婚することになりました。その事実を受け入れられず、人と会うことが怖くなって、不登校になってしまいました。で、誕生日の時に、実母から「あんたなんて生まれてこなければ誰も良かったのよ」っていう言葉をいただき、これをきっかけに誕生日がトラウマになってしまいました。なので、365日に1回、7月のある日だけなんかこう、大切な人を失ってしまうんじゃないかなっていう、トラウマを抱えています。なので、もうそろそろなので、また変な感じでソワソワしています。これが僕の高校生時代です。

両親の離婚をきっかけに、高校生時代まであった赤ちゃんの頃の写真とか、小学校の頃の写真とかって全部捨ててしまって、ほぼほぼなかったんですね、写真が。で、唯一卒業アルバムを開いた時にあった1枚が、すごいちっちゃく写っているんですけど、これだけ卒業アルバムに写っていて、それ以外は不登校だったので、ほとんど修学旅行の写真もなく、唯一、横浜の中華街で撮った写真がありました。

その後、大学で急に北海道に来て、高校の時の恩師に会ってなかったんですけど、2015年夏、国会前にいることを知りました。で、北海道から東京に来たんですけど、その時に恩師に会いました。右の方が恩師です。

大学ではいろいろな勉強がしたいなと思って、たまたま北海道の、札幌学院大学を選択しました。1年目は、虐待、児童虐待の勉強をして、実は自分は虐待を受けていたということに気がきました。社会学に触れたり、教育学、特に特別支援教育について学ぶとともに、「地域貢献」という授業の中で、自分も「子ども食堂」をやりたいというふうに提案して、「子ども食堂」を立ち上げ、代表をしました。また、自分の抱えている愛着障害とどのように向き合うか、ということを考えたり、北海道の「子ども食堂」を研究しました。

いろいろなボランティアやアルバイトをしていたんですけど、これは「社会福祉法人麦の子会」というところで、発達障害を抱えている高校生や不登校の中学生と一緒に勉強して、いつも勉強が終わったあと、みんなで食堂に行って、ごはんを食べている写真です。で、実際に自分たちで、大麻銀座商店街から協力を得て「こども食堂」を立ち上げ、左の写真は、高齢者と、お母さんたちと子どもたちと学生が、30人ぐらいごはん、週1回毎週金曜日食べる写真と、商店街、真ん中の写真は商店街で、商店街なんですけど、子どもたちがチョークで、落書きをしまくったっていう写真と、一番右側は、子どもたちと大学生が遊んでいるところです。ここで大事なのは、学校では勉強ができる、できないと優劣をつけられるけれども、この中では特に優劣をつけられることもなく、ただただ褒めてもらえるっていう、そんな空間になっています。今は、札幌学院大学の後輩学生が引き継いで活動を継続しています。

そんな「子ども食堂」とか、自分の生きづらさを研究していく中で、実は、僕、奨学金を借りているので、夢や希望を持った学生が、ほんとに夢や希望を抱ける社会なのかなと、そう思って国会のほうに行った写真が左で、真ん中の写真は、札幌学院大学の正門の前で「選挙に行こうよ」というプラカードを配ってみたり、一番右側は、奥田愛基くんという方と講演会で一緒にした時の写真です。

今の生活は、本学、札幌学院大学の研究生として、まだ「子ども食堂」の研究を続けています。札幌市の児童相談所で、一時保護所というところで夜間指導員をしているので、夜、お仕事しています。そして、若者の支援施設で昼、働いています。大学に行かなくて夜仕事がなく、昼仕事がない時に、NPOサポートセンターに行って、「子ども食堂」を支援する方法はないかということを探しています。

奨学金の返済額が約600万円あるので、10月から月2万円を20年間返すので、結婚できるのかなと思ったりしています。何か、相模原の事件とは直接的には関係ないかもしれないんですけど、この社会の中で作られた生きづらさを抱えているのかなと思いがら今日は、登壇させていただきます。よろしくお願いします。

(拍手)

新田: はい。お三方、どうもありがとうございました。それでは待ちに待った雨宮さんにも、ちょっと長めの自己紹介をお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

雨宮: はい。すごい、濃い、濃い3人の自己紹介の後なんですけれども、あらためまして雨宮処凛です。今日はありがとうございます。暑い中。

(拍手)

物書きとして、活動家として、この10年ぐらい、11年間ですけど、主に貧困とか格差とか生きづらさという問題をずっと取材して、執筆して、いろいろ活動をしているという者なんですけれども、貧困の問題を取材していくなかで、すごく障がい者の方との出会いというのがたくさんあったり、あるいは、私のいとこが知的障がいを抱えていて、20代で彼女は亡くなってしまったんですけども、私より5歳ぐらい年下で。

なんで亡くなっちゃったかっていうと、知的障がいで、ある時、風邪ひいてその菌が脳に入ったとかで、ものすごい危険な状態になったんですね。で、救急車を呼んだんですけども、知的障がいの人は、自分の症状を説明できないから受け入れられない、身体障がいの人だったらいいけど、知的障がいは、だめだということで断られて、病院で。それで、翌日ぐらいには、病院が見つかったんですけども、そういうことがきっかけで、本当にいとこが亡くなってしまったということが、私の20代後半、いとこは20代半ばぐらいだったんですけど、そのときに、そういうことがあって、もう、十数年前のことです。

私、そのとき、すでに物書きにはなっていたんですけども、こういう活動をまったくしていなかったんですね。どちらかというとサブカルチャーのほうで書いていて、社会的な弱者の問題とか、そういうことにあまり関心がなかったとか、知らなかったし、知らない中で、いきなり、すごく仲良く、ちっちゃい頃から仲良くしてきたいところが、あ、こういうかたちで、知的障がいだからという理由で、こういうかたちで、なにかすごく命が、軽く扱われてしまうことに、すごくびっくりして、ある意味私自身が、その数年後に、貧困とか、いろいろ社会的弱者の問題なんかに取り組んでいるんですけど、そのときに感じたものすごい怒りと、でも、これを書き手として、どういう場所を書いていいかわからないという、なにか、焦りだとか、それがすごく自分の中で起きるきっかけとなって、原動力になるものとして、あるんですけども、そのあと、それからずいぶん経って、貧困や、この、いろいろな弱者の問題、ホームレスの人のことだとか、障がい者の人のことだとか、非正規で働く人や貧困の弱い立場の人だとか、こんなに日本で、こんなにいろいろな問題があったのに、全然自分は見えてなかったんだということ、ある意味、改めて再発見したというのが、ちょうど11年前ぐらいになりますけども、ということで、ちょっと写真を出していただこうかと思います。

私もちょっと最近の写真を持ってきたので、あ、これはですね、エキタスという、私が、これは結構行きつけ、行きつけのデモみたいな感じで(笑)。はい。最低賃金1500円をスローガンに、北海道にもありますね。

札幌にも。ユニキタとか。最低賃金1500円を掲げて、活動している、東京のエキタスです。

AEQUITAS (エキタス)は、ラテン語で正義とか公正という意味で、2015年9月の安保法案が成立してすぐ、ぐらいに結成された若い人、学生とかのグループです。明日も、安倍政権をなんとかしろっていうような、ちゃんと説明しろっていうようなデモを新宿でやるんですけど、そこにも彼らはサウンドカーを出す予定です。



じゃ次をお願いします。これはですね、あれですよ。日本ペンクラブの作家の集まりなんですけど、共謀罪って表現の自由を脅かすものだからということで、漫画家のちばてつやさんとか、浅田次郎さんとか、私の隣にいるのが香山リカさんで、その隣が森達也さんとか、そういうかたちで共謀罪成立したら、自由にものが言えないよという、反対の集会をしている写真なんですけど、そしたら成立してしまった訳なんですけど、そんなような、こういうこともやっているという、はい。



次、これはですね、「生存権集会」って毎年5月ぐらいにやっているんですけど、憲法25条、生存権を守れということで、貧困問題のあと、もう、すごく参加者には、障がい者の、いろいろな活動、障がい者ならではの活動をしてくれる人が、すごくたくさん来てくれて、「私たちのことを私たち抜きで決めないで」というプラカードを持って、という「生存権集会」の写真です。はい。



あ、これはですね、これは、あれです。5月23日、今年の。狭山事件から、54年だったかな。狭山事件って冤罪の。女子高生が殺されて、そしたら部落に住んでいる石川和雄さんという人が、20代で捕まってしまって、ずーっと何十年も刑務所にぶち込まれるという、そういう冤罪事件なんですけれども、これみんな冤罪の事件の方で、こっちから、布川事件の桜井さんという方で、その隣が袴田巖さんのお姉さんで、その隣が足利事件の菅家さんで、その隣が石川さんで、で、私なんですけれど、この4人、袴田さんはお姉さんですけど、この4人の獄中は、合わせて125年になるんです。ひどいんですよね。間違っとか、いろいろ警察のメンツだとか、いろいろなことで捕まえて、本当に4人合わせて125年も獄中にぶち込むと、何かそういうことがまかり通っているという、そんな恐ろしさも。



最近もありましたよね、再審が始まるという、あの今、90歳の、あの方の共犯でことで、一緒に殺したって自白したっていう方が、3人知的障がいだったんですよ。だから、すごく、この冤罪とかの背景に、知的障がいだったり、あと、石川和雄さんは、狭山事件のこの方は、小学校途中で中退して働きにいらっている。部落で、ものすごい極貧の中で教育課程からの排除があって、字も書けなかった。で、字も書けなかったから、この事件では、脅迫状が来ているから、彼は犯人ではないというような説の、証拠というか、そういうものになっていますけれども、やっぱりいろいろな障がいの問題だったり、教育が受けられないっていうことも冤罪の背景にあるっていうのは、すごくあるし、冤罪でなくとも、いろいろな刑務所で、累犯障害者という

言葉もありますけれども、いろいろな障がいを抱えているからこそ、刑務所にしか居場所がない。で、繰り返してしまう。というような、そういう話ですので、すごくなんかこういう話につながっていくんだと思っています。

新田：はい。ありがとうございます。では、ここから少しずつ本題に入っていきたいと思いますけれども、今回の「対話集会」は、相模原事件を一つのきっかけとして「人間の尊厳と生命について考える」というテーマです。安積遊歩さんが公開講座で、「対話」は、言葉のない人とか、しゃべれない人を排除するから、「聞き合い」にしたらいんじゃないって言われて、「対話集会」っていう宣伝しちやっているの、いまさら変えられないので、どうしようかなと思ったんですけども、でも、「聞き合い」で、今日は「聞き合い」、「聞くこと」とか「聞いてもらうこと」を大事にするような進め方でいきたいと思っています。

雨宮さんの今までのお仕事は、私の印象では、書く力もプロなんですけれども、すごく「聞き上手」な方ではないかと思っています。というのも昨日も、この3人がずっとしゃべってましたから。打合せ中、どっちかというと彼らがしゃべっていて、雨宮さんが、うんうんと聞いているっていう。ということで、お互いいろいろ、「聞き合う」ということで進めたいと思います。

前置きが長くなりましたけれども、雨宮さんから、率直にあの事件からお感じになったことを、お考えになったことからお話していただきたいんですけども。

雨宮：はい。そうですね、相模原の事件、テレビで知ったんですけども、事件を知って、犯人が衆院議長に出した手紙が、ものすごいテレビで流れましたよね。私は、ああいう手紙が、そのまま流されたっていうことに、すごくショックというか、あれを、垂れ流していい内容ではないというか、もうちょっとなにか配慮が必要だったんじゃないかっていうようなことを感じました。ちょっと人を殺してしまうぐらいの言葉の強さというか、残酷さっていうものがあって、まず、それがすごい、どう思うんだろ、これを見ている障がい者の人たちとか、家族の方とか友達とか、そういう人がどう思うのか。それと同時にテレビの中では、あの事件を報じる時に、こんな19人もかけがえのない命が、命が尊いと、もっとちゃんといろんな場面で教えてくれ、みたいなことをテレビのコメンテーターの方が言っていて、でも、それがなにか、ほんとかよっていか、もちろん命が尊いしかかけがえがないっていうのは、そうなんですけれども、いやでも、そうじゃないと思いついた、この社会の問題っていうのがある。

で、なんだろうな、やっぱり命が大切だとかって言いながらも、世の中で言われていることって、生産性が、やっぱり人間の価値なんだとか、競争に勝ち抜いて利益を増やした人間のみが生きていいみたいな教育を、私自身もそうだし、今もそうだと思うんですけど、子どもの頃から受けていたわけですよ。愛情とか取引の道具にして、交換条件にしたりだとか、とにかく未来を人質に取るようなやり方だとかで、そんなんじゃないや社会に出てからやっていけないとか、とにかくひとりでも多くの人を蹴落として、自分だけが上にのし上がるということを散々言われて、そういう価値観が当たり前になった社会って、劣った人間は排除してもいいっていうことを同時に言っているような、すごくダブルスタンダードだなと思っていたんですね。

そこにあの事件があって、やっぱり、このかけがえのない命とか、そんな言葉が本当に上滑りするとか、ただ単に、本当に普段から大切にしましょうよっていうのは、思いました。普段から、生産性がなくても生きていいし、なんらかの条件をクリアして、ハードルをクリアしなくても、生きていいことは価値があるし、そういう社会ができあがっていかない限り、なんていうのかな、あの犯人が送った手紙だとか、あの彼のものすごく歪んだ思想っていうものが、やっぱりこの社会にどこか持っているものなんですね。だから、それを突き付けられて、なんだろう、沈黙してしまった社会っていうような、それをすごく感じました。

新田：本当に沈黙しちやっているんですね。言葉が出てこなくて、そのままになっちゃって。今、学生に聞いても、え、何の話ですかみたいになるんですね。相模原のことを忘れちゃっているっていう。それって本当に

まずいなって思うんですけど。今の話を受けて、ぜひ、登り口さん、当事者としてのご感想とかご意見とか伺いたいんですけど。よろしいですか。

登り口：はい。私自身もあの事件が起こった当日、朝のニュースで、この事件のことを知りました。皆さんが言うように、私自身も、あ、これは起こりうることだったなっていう感想を持ったのが、正直なところなんです。どうしてそういうふうにしたかという、私自身も、講演活動をしたりですとか、できるだけポジティブにいろいろな物事を考えて生活していこうというふうにやっていると、周りから見ても、ポジティブな人だねっていうふうには、見られるようなことは、自分からしてきたし、そういう印象を得られてはきたんですけど、やっぱり、そうですね、今まで、生まれてから受けてきたいろいろな、差別ですとか、ちょっとした言動であったり、それから、普通小学校もなかなか、校長先生に受け入れられなくて、介護が必要だったら難しいとかっていうふうに、受け入れられなかったんですけど、条件付きで、母親がいる条件でやっと通学ができたとか、いろいろな細かい数えきれないほどのことを経験してきた結果として、やはり、こういったことが起きるんだなっていうことを思いました。

それと、あと、私自身もヘルパーを頼りながら生活をしていて、他の人の手がなければ生きていけない状況の中で生活をしていますので、例えば、車いすからベッドに移動するときに、ヘルパーさんが例えば、言ってしまえば、どんなことを考えているのかって、体に触れるとわかるんですね。関係性をちゃんと作っていけば安心感を持てますし、逆に言うと、その人と全く関係性が崩れたとして、例えばヘルパーさんに、私がこうしてほしいとか、ああしてほしいとか、お仕事として来ていただいているので、あと、自分の生活時間があるので、いろいろなところをお伝えしたときに、なかなかそのヘルパーさんの中では受け入れられなくて、それがちょっと不機嫌な感じに出たりとか、その態度、触られているときの態度にも影響が出て、例えば、私をベッドのほうに移動させたら、それをドスンと、結果としてやろうとしていたわけではないと思うんですけど、負担がかかるとか。そういったことを経験していますので、今回、被害に遭われた方々や、遭われるかもしれない方々のことを考えると、非常に重く受け止めていました。

先ほど、沈黙っていう話がありましたけれど、悪いって言っているわけじゃないんですけど、わたくしの職場でも、なかなか、そういった相模原事件のことについて口にするとということが、実は、ほとんどなかったんです。でも、小さい所で、部署、部署であったりとかは、したようなんですが、全体としてはなかった気がしました。それは、わたくしの職場だけではなくて、きっといろいろな所で、沈黙っていうのはあったんだと思います。それは、本当に、それがもっと一番怖い話だなって思いました。

でも、いろいろ聞いてみると、これについて、この事件が起こったからといって、私たちの気持ちは揺らがないとか、なんかそういう形での対抗心みたいなものがあつた方がいらっやあって、それで、話す必要はないとか、犯人とは自分たちは程遠いことだと思っているっていうふうに、話していた人がいて、やっぱりそれぞれで考えていることだったりとか、持っている観点っていうのが違うと思いますので、本当に何を考えているのかわからなかった恐怖っていうのが、この事件を受けて、これまで1年経っても、まだ私の中にありました。

なので、実は、職場でこの事件について話す会を、私自身と、もうひとり、一緒に、そういうふうにいる人がいたので、一緒に話そうということで、話し合いの場を職場に作りまして、そうするとですね、本当にいろいろなことを思っている人がたくさんいて、ちょっと話が長くなるので、全部はお話できないんですけど、やっぱりその話が、すごく私の中で、話ができたとほっとしたなっていう印象があります。全然ちよつと、まとまりきれないんですけど、言いたいことは、私の方から、以上です。

新田：はい、ありがとうございます。その上で、今現在、雨宮さんが、どんなことを考えて、どんなことを大事にしながら、今の登り口さんのおっしゃったような、話し合える場があるとか、それだけでもだいぶ違ったりとか、

あるいは、一方では恐ろしい沈黙っていうのが続いていたりとか、そういう中で、雨宮さん、現在、実践活動で大事にされていることについて、ちょっとお話しいただきたいと思うんですけど。

雨宮:あの一、なんだろうな、車いすの問題、ニュースになった、そういう問題で言うと、最近、バニラ・エアで、木島さんという、158か国に行って、車いすだからって断られたっていうことが一度もなかったっていう人が、なんと日本の空港で断られて、自力でタラップを登られるっていうことが、話題になったわけですけどね。私は、彼の活動は本当にすばらしいなと思って、ああいうふうにはひとり旅、ほとんどひとり旅で行っているんですけども、車いすでもひとり旅ができるよって、自分で実践してバリアフリー研究者としてやっている、というのを、すごい実践なんだと思うんですけども、やっぱり、やっぱり思ったのは、あその後、1回すごく、クレーマーとか、プロ障がい者とか、ものすごいバッシングが起きたんですよ。

で、やっぱりこれは、障がいに限らず、私、貧困の問題もやっているし、あるいは福島原発から避難している人、あるいは、沖縄の問題で、戦っている沖縄に住んでいる人とかに対して、なんだろうな、貧困の人とか、障がい者の人とかが、沖縄の人とかが、すいません、すいませんって謝りながら、なんか謝りながらいけば、絶対バッシングされないんですよ。同情をかうんですよ。同情だけで何にもしてくれないんですけども、まあ、同情はするんですけども、ひとたび、弱者、弱いと思っている人が主張したら、とんでもないと、ぶっ叩くっていうのは、もう、ずーっと続いているこの国の、いつからかわかりませんが、とにかく物を言うと、ぶっ叩く、物を言う、なんていうか、すごいんですね。叩かれるのが。だから、この国を良くしようとか、この国を少しはマシにしようということに対しては、1ミリも力を使わないけれども、そういう人をぶっ叩く、ぶっ叩いて、嘲笑してあざ笑うことには命がけになるっていう人が、この国には、結構多数派なんだという感じがして、このやり方だと変わらないんだろうと思うんですね。

その背景には、日本において、消費者としての振る舞いというか、消費者としての教育しか受けていないんですよ。主権者として、有権者として、どう物を言っていくか、そういうことがまったく、そういう教育をまったく受けていないままに、学校では、意味不明の校則とかでも、とにかくルールを守れ、何も考えずに思考停止してルールを守れ、っていうことだけを義務教育ですり込まれて、その果てに、そのルールに従うっていう従属と思考停止をどこでも解除されないんですよ。で、これは、社会に出れば出るほど、もっとひどい不条理ルールに縛られて、もっと思考停止していかなくちゃいけないような状況にあるので、やっぱりこれは本当に根深い。

どこが発端なのかというと、ひとつは大きく教育というのがあり、でも、もう今、大人といわれる世代の人たちも、こういう中で生きてるので、多分そういう消費者マインド以外の振る舞いを許さないっていうような、そういうことがすごくあるので、そういうこともわかっていたかかないと、と思って、デモなんですけれども、デモの映像を持ってきました。ここで話されているスピーチの内容は、今の日本のいろいろな問題が凝縮しているんで、ぜひ見てほしいと思って、じゃ、お願いします。

デモ映像(スピーチ内容)

「この前、弟から電話がかかってきた。」

「姉さん、自衛隊の一次試験に受かったけん、次も受かるかもしれん。ただで国家資格も取れる、大学に行ける」って電話がかかってきた。

私はせっかく大学に行ったのに、本さえろくに読んだことがない。ずっとバイトして、寝てた。

まわりは週7スナック、トリプルワーク、もっと、もーっと働いても一限に出た。部活もやってた。

自分はなんて甘えてるんだろうって責めて、将来設計なんてできもしない。自分がいやになってばかりだ。就職したって手取り14万じゃ、奨学金返して、好きな人や友達ともいられない。子どもなんて育てられないよ。

そんなの見ていた弟は、大学行くのに教育ローンと奨学金で1千万超えるか、それとも自衛隊で大学行くか、そりゃ迷うよ。

ねえ、なんで選択肢に社会保障制度や労働組合がないんですか。

誰も何にも教えてくれないくせに、知りもしないくせに、『おまえより大変な人はいる』『自分も苦労したけどなんとかあった』『社会のせいにするな』『そんなことばかりして趣味ないの』『もっと人生経験積んだら考え方も変わるよ』

そんなこと言われたって、おなかいっぱいになんかならねえんだよ。

あとどれくらいかわいそうなら、あとどんな経験すれば満足なんだよ。

具体的な使える制度を、方法を教えてくれよ。頼り方を教えてくれよ。

私よりかわいそうな人がいたらなんなんですか。昔に比べればマシですか。それであなたは幸せになれるんですか。あなたの大切な誰かは何かを救えるんですか。

不幸比でも我慢大会ももういい加減終わりにしませんか。もう十分だろ。おかしいことはおかしいって言っていいだろ。

おにぎり食べたいって言って餓死する人のいる社会が、過労死するまで働くか自殺するしかない社会が、仕方ないわけないだろ。人が死んで電車が止まって舌打ちするだけのくせに仕方ないなんて簡単に言わないでよ。

<https://www.youtube.com/watch?v=PXekBKzgUcl> より

雨宮: はい、じゃ、そこで、止めて。ありがとうございます。これはですね、先ほど私が出したエキタスというグループの藤川里恵さんという、今25歳なんですけれども、その方が、エキタス2回目のデモでしたスピーチで、伝説のスピーチと呼ばれていて、ある意味、今のいろいろな、なんだろうな、黙ってる圧力だとか、おまえより大変な人がいるから黙ってるっていうような、そういういろいろな問題が全部凝縮されているような彼女のスピーチで、直接、その、障がいの話題なんかは言ってないんですけれども、なんかすごく、なんか根底的なものがあるなと思って、ちょっと紹介させていただきました。ご感想は。

新田: じゃあ、宮本さん。どうですか。

宮本: こういうデモの映像を見るのは今日で2回目だったんですけど、やっぱりこれを見たとき、私もいろいろ思ったところはあって、私自身はそんなに、こう、家の状況としてはそんなに厳しい状況もなく、わりと自由にやっつてこられた方だっていうのは、とても恵まれた環境でこれまでずっと暮らしてこられたんだなっていうのは、思いながら、でも今、病院の相談員として働いている中で、内科の入院を私担当しているので、高齢者の方がすごく多くて、退院後の行き先をどうしようか、体の状況は前より悪くなって、次どこに行こうかってなったとき、やっぱり、いろいろ制度はあるものの、やっぱりお金がどのくらいあるかで、選べる選択肢がすごく変わってきていて、その中で多分、ご家族もご本人も折り合いをつけて。本当は、違う選択肢も選べればいいんだけど、そうじゃない中で、限られたこの中で選ぶしかないっていう中で、決めていらっしゃる方が大多数だっていうのは思っていて、それってほんとに、こう、自己選択とか自己決定とかって考えたとき、それってほんとに選択できているのかなっていうのは、日々疑問を感じることもあったりします。

前に障がいの相談を受けているときも、同じようなことがたくさんあって、生活保護世帯の障がいがあるお子さんとかも、ひとり暮らししたいっていう希望を持っていても、なかなかそこから独立して生活を立てていくってことが、生活保護世帯が世帯分離が増えてしまうっていうところでのハードルも、もちろんあるし、障がいがある子で、障がい年金がもらえるような子だと、その子の年金が家計を支えているっていうことがあっ

て、その子がいなくなると、ほぼその世帯は生活保護を受けなきゃいけないってなってしまうとか。そういう中で、こう、本人が本人なりに考えて、自分が家を支えていくんだと思っている人たちもいれば、そこまで考えは至っていないんだけど、まあ、しょうがないよねってあきらめて生活をしているっていう方も、やっぱりたくさんいらっしゃるし、ひとり暮らししている方でも、そのひとり暮らしの中でも、したいように暮らせているかっていうと、いろいろな制約の中で、すごく多分我慢をしながら生活されているのかなっていう方にもたくさん出会ってきていて、生活するって私たちも、何かどこか我慢しなきゃいけないかっていうと、限られた中で選ばんきゃいけないっていうのは、誰しものがそうかなとは思いますが、そういう障がいとか、高齢とかっていうところで、さらに狭まっているところもたくさんあるなっていうことは、日々感じています。

だから、何のための制度なんだろうとか、なぜこの制度の中でできなくて、他の制度のこっちを活用できるとなるとかなるんじゃないかっていうこともあって、そういう制度の使い方ってそもそもどういうことかなって思うところもたくさんあるので、万人にマッチするように作るの難しいとは思いますが、そこに、なにかちょっとねじれた構造になっていってしまうっていうところが、障がいの現場にしても病院の現場にしても、どこにいても同じようなことに出会うので、一体何をどうしたらいいんだろうとか、自分も相談をしている中で無意識のうちに私自身が選択肢を狭めてしまって、もう自分自身も相談の中であきらめて、この人が選択できる範囲での提案しかしていないときもあるんじゃないかって、相談の中で感じる、そこがちょっとジレンマになっていたりとか。

じゃあ、その中で自分がどうできるんだろう、っていうところでの答えが、なかなか見つからなくて、その中で、札幌で障がいの相談をやっていた頃は、たくさんの仲間がいたので、みんなで話し合いたとか、ちょっとずつだけ自分たちが力を合わせてできることは何かっていうところで、少しずつ、少しずつやってきたところは、あるのかなとは思いますが。そういう、日々の積み重ねもあり、ちょっと私もまとまらなくなってきちゃったんですけど、そういうような、制度ってなんだろうとか、社会保障の問題も含めて、それがうまく使えないというか、機能してないって、日々感じているなと思っています。以上です。

新田：休憩を入れようっていう時間に既になっちゃったんですけど、二本松くんから一言どうですか。映像を受けてとか。

二本松：僕、結構、多分エキタスの彼女とは年が近いと思うんですけど、なんででしょう、子ども食堂を取り組んでいて、実際に子ども食堂をやらない方に、子ども食堂のお話しをすると、「言っても昔よりは食べれるでしょう」とか、「いや、洋服だってきれいだ」とかっていう、言われていて、この講演会にあたって雨宮さんの本を読んでいると、「犠牲の累進性」という言葉で語られていて、その通りだなと思って。

自分よりあなたの方が劣っているから、大変だからがんばんなさいよ、みたいなのがすごくあって、奨学金借りていたので、そのときも奨学金の問題をいろいろな所で訴えると、「でも1千万借りてる人もいるでしょ」とか、「あなたなら将来まだあるから大丈夫よ」みたいな感じで、こう、具体的に解決できる方法を教えてくれるような、大人とか同級生はいないんですよね。その辺は、やっぱり、社会に作られた生きづらさを押し付けられてしまっていて、その押し付けられてしまった自分の怒りを、自分の責任で受けるのか、それを、こう、どこに向けるのかによって、少しでも間違えると、今回の事件の犯人のような形に出してしまうのかなっていうふうには、思ったので。

新田：いかがでしょうか。今のお二人の話。

雨宮：でも、そうですね。やっぱ、あの犯人が、理解不能なモンスターにしちゃ、すべて話は終わってしまうので。やっぱり、なんか、どうも私たちの中に彼は内在していて、私たちの中にも内なる優生思想ってものが絶対

にあって、それがどこから来たのかとか、どのように作られたのかとか、どう、それを乗り越えられるのかっていうことを考えていく。でも、この国では自動的にいろいろな、なんだろうな、いろいろな形で、埋め込まれているので、優生思想的なものというのは。だから、そこはやっぱりちゃんと見ていくしかないんですよね。たまにそれを、なんて言うんだろな、厳しく、そんなこと厳しくしたら、言葉狩りだとか言う人も、言われるようなこともあるんですけど、やっぱり、それが人を傷つけることであったり、こういったジェノサイドにつながるようなことであったり、そういうものはやっぱり、相互に、自分もそうだけど、相互にチェックしていかなくちゃいけないっていうのは、すごく思いました。はい。

新田：はい。ありがとうございます。ちょっと予定より押しちゃったんですけど、今から10分ほどですね、休憩を取りまして、休憩後は全体を明るくして、会場ともやり取りしながら進めたいと思いますので、35分まで休憩にさせていただきます。

<休憩後>

※録音ミスのため冒頭5分程度カットされています。ご了承ください。



新田：雨宮さんは本当にスタート段階からインターネットもひとつの場として活動されてきたのかなと思うので、今のメディア状況のなかでの問題を乗り越えるような仕事をやっていくためには、どんなふうにご利用したらとか、あるいは、どんなふうに見ていったらいいのかなということが、ときどきわからないんですけど、その辺りはどんなふうにお感じになりますか。

雨宮：うーん、そうですね。なんだろう、結局、いろいろな、ネットで原稿アップすることもあるんですが、なんか、炎上させてすごい読まれたら、むっちゃギャラが上がるとか、原稿料が上がるっていうような、ところもあるんですね。だから、そこを、本当に、なんていうんだろな、これを書いていいのかどうかとか、倫理だとか、そういうものよりも、やっぱ、お金ですよ。そういうものを優先される場所になって、インターネットもなっているし、それは週刊誌あたりもずっとそうですよね。少年犯罪が売れるとか、そういうことで、少年犯罪は減っているにもかかわらず、すごく少年犯罪、少年危ないブームみたいなもので、お金儲けるみたいなことがあったので、やっぱり、メディアのかつての良心っていうものよりも、殊に出版業界なんてどん詰まりなので、

結構なりふり構わず。嫌韓とかって、韓国や中国を、すごくバッシングするような本が出るっていうのも、出版社があれが売れるんだって上層部の判断があるわけですよ。だから、そういうところでやっていくことによって、そういう市場主義でやっていくと、良心とか倫理だとか道徳だとかモラルなんかを求めても、いや、そんなもの1円も、1円にもならない、とにかく売れた方がいいんだっていうふうに、そういうふうに社会がなあってきちゃっている、っていうところもあるんだと思うんですね。なので、そこをどういうふうに脱却するかだと思います。はい。

新田: 大変難しいテーマですけども。でも、市場を超えたところに開いていかなきゃいけないだろうなとは思いますが。さっきのエキタスの、あの、なんていうかパフォーマンスをYouTubeで見られるんですよ。だから、北海道の人間だと、東京の、その、一番大きな動きみたいなのは、なかなかこう、アクセスできなかつたり、見られなかつたりとか、入ってこなかつたりとかするんですけど、インターネットの良さは、そういうすごく今、リアルタイムの動きにどこにいても参加できるって良さがあって、負けずにどんどん、どんどん、こう、あの、一部の情報だけで、こう、偏ったことにならないような発信の仕方をしていかなきゃいけないのかなと思っ、今はしているんですけど。はい。登り口さん、今までの話を受けて、どうですか。

登り口: 私が、これまで思ってきたことは、この社会の中に、過剰な自己責任の押し付けがあるんじゃないかなというふうに思っていて、で、そういうことが、自分の身に起こったりとか、自分の大切な人の身に起こったときに、どういうふうに私たちは反応していけばいいのかっていうことを日々迷っていて、その部分は、お聞きしたいと思うんですが。

具体的に、私の経験を二つほどお話ししますと、二つとも交通機関を利用した時だったんですが、JRでいつも車いすで乗るんですが、スロープを駅員さんに頼んで、乗せてもらうんですが、そのときに私が、案内所に行って、「何時何分のに乗ります。お願いします」ということで、話をするんですね。

で、ある日、指定席を予約していて、その時間の15分ぐらい前に着いたんです。研修や仕事などがあって、本当に、急いでも、その15分前ぐらいだったんですね。で、そのときに、駅員さんに言って、乗せてくださいというふうに頼んだ時に、駅員さんに、こう言われました。「20分前ぐらいに来てもらわないと困るんですよ」と。話をしたのが15分前で、20分前に来てくれてないと困りますって話をされました。私は思わず、「いや、すごい急いだんですよ」という、それを私が言いたくなってしまうような、そういう状況に立たされるような言い方をさせていただきました。

で、そうすると、駅員さんは、ちょっと半笑いで、私の目を見ずに、「いや規定で決まっていますから」というような話だったんですね。状況を言うと、全然人手はあって、スタッフはいましたし、スロープを出すスタッフは、ほかにもいますし、全然できる状況だったんですね。だけど、あの時、そういうふうな扱いをされてしまって。

また、もうひとつ、バス会社、ノンステップバスが少ないものですから、事前に予約を取らなければならぬんですね。一週間ぐらい前に連絡をして、何日何時に乗りたいてことで連絡をするんです。で、そうすると、なぜ予約かって言うと、ノンステップバスを配車するので、配車っていうのは、シフトに組むのでっていうことで、そのシフトが組まれたかどうかを、そちらから電話をしてもらえますかって言われたんですね。本当は、会社のほうの都合でシフトを組まなきゃいけないのに、それをこちらから乗れますかっていうこととか、電話をこちらからする、会社から来るのが普通なんだけれども、それがなかった。で、それにちょっと反論したところ、「電話できないんですか」というふうに言われてしまったとか。そういう言い方も多数の人からは、決して多くはないけれども、でも、そういう扱いをしている人とめぐりあうんですね。やっぱり、それが、平成28年障害者差別解消法が施行され、障がいがある人に合わせて環境を整えるっていうことが、法律で決まりましたが、やっぱり、一人ひとりの気持ちの中に、全然落とされていないというか、そういった感覚を、ず

と、20年以上前からあった感覚がまだ、同じかたちで残っていたりしています。

こうした問題が、結構、本人の問題としてとらえられていて、もちろんバスがなかったりとか、職員がいなかったりとかするのかもしれないんですけど、全然それに対する説明も何もない。こういうふうにそちらでやってくださいよ、っていうことで突き付けられるっていうことが現実にあります。

こういったときにですね、社会運動として、もちろん、私自身も障がい者運動に関わって、大きな運動とかもしたりしたことがあったんですけど、ただ、そこまでの運動に関われなかったとか、関わることをしなかったりとか、いろいろな状況で誰もが社会運動、大きなかたちとしての運動に関われるかって言ったら、私はそうじゃないと思っていて、個々人での日常生活の中で、そういうような扱い方をされたりとか、あと、一緒にいる、そのヘルパーさんとかが、そういった状況において、ヘルパーさんがどう反応していけばいいのかっていうことも、話しているんですね。

なので、こういった本当に日常生活の中で、こういったことを強いられていったときに、こちらは、どう反応していけばいいのかっていうことをですね、雨宮さんにお聞きしたいなと思っています。

雨宮：言っちゃっていいと思いますよ。その、15分前とかに、行ったら20分前とかって言われた、なんか、普通にひとりに来て、そういうので大丈夫じゃないですかっていうようなことなわけですから、私は、だから登り口さんは、そうやって、駅に行つてとか、バスに乗ろうとして、乗って、で、こういうところで、コミュニケーションを取っていくっていうこととか、こういうところで話すっていうことは、「超活動」ですよ。ものすごい社会運動で、だから、すべての生きてる、すべての場面で、ある運動ができるっていう状況。ま、それは、障がいあるなしにかかわらずですけども、でも、特に、それはどんどん言うべきだし、だから、それに対してやっぱり、その、バニラ・エアのようにクレマーとかって言う人がいるわけですけども、そのことで、今週、原稿、ある原稿を「マガジン9」っていうところにアップしたんですけども、会話、クレマーとかっていうんじゃないかって、ある本の一節を引用したんですね。それは、杉田俊介さんという、障がい者運動にも詳しい人が、『非モテの品格』っていう本を書いていらして、非モテについて書かれているんですけども、後半は障がい者運動とか、そういうことをかっちり書いて、弱さとか障がいって問題を中心に書いているんですけども、やっぱりそこで、いかに今の自分たちが、無意識に障がい者運動の恩恵を受けているかっていうことが、すごい書かれているんですね。

70年代の「青い芝の会」、脳性麻痺の当事者の人たちがこういう運動をして、バスジャックまでして、バスに乗れない人がいなくなるだとか、乗りやすくなるとか、そういうことを、本当に命がけで勝ち取って、地道な行政交渉とか、民間企業と交渉を続けてきたから、今、普通に世の中のお父さんお母さんたちは、ベビーカーで電車に乗れるし、自分たちもエレベーターを使えるし、スロープも使えるし、そういうような社会変化は全部、障がい者運動が闘って勝ち取ってきたことで、どんなにそれを知らなくても、もう自分たちは恩恵を受けてしまっているんだ、っていうことを書いている。

すごく私はそれに共感して、なので、この、物を言っていくっていうことは、クレマーでもなんでもなくて、それによって社会はみんなにとっていい方向に変わってきたし、これからも変わっていくっていうことは、もう歴史が証明しているのだから、どんどん言ってほしいと思います。はい。

新田：はい、ありがとうございます。もう質疑応答の時間が、残り20分しかないんですけども、この後、時間をみて会場にお越しの方々の質疑応答に入りたいと思っています。なかなか手を挙げにくいとは思いますが、ぜひ積極的にお声を聞かせていただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

会場Aさん：帯広から来まして、この間のひと月前の講座と今日と、2回目になります。実は、わたくし38年ほど知的障がいの施設を3つほど勤めてきて、それで仕事を終わりました。

そこで思っ、ずっと、その職場でよく職員同士で話しをしてきたのが、俺たちの仕事って何？何か大したいいことしてるように、皆さんが言うし、必ずその、感謝される仕事です。何かと大変ですよという言葉の裏に、私はできないわってということも思っているのかもしれないけれども、先ほどの話の中に、感じたんですけれども、やっぱり、一番近い、障がいを持つ人たちに、一番近い人たちが、最も差別者になり得るというのを、私はずーっと思ってきています。

ですから、たまたま私がですね、ここの大学より、もうちょっと札幌よりの学校を、四十数年前卒業した者なんですけれども、私の大学時代の卒論のテーマは、アイヌ差別の問題です。それで、その時に、卒業論文に、「未完」という、すべてに書いているんですよ。それで、その私の担当教授は、「君それまずいんじゃないの」と。しかしこれ私の問題としてはとても抱えきれないけれども、私の一生の問題ですからということと、平然と受けてですね、非常に青臭かったんですけれども、いまだに、もう一度ですね、定年して、もう6年ぐらいになりますけれど、もう1回、その、今、道新から、アイヌの歴史の年表をもう一度作り直してみようかなというのを思っっているんです。

その頃の新聞、昭和50年代の新聞を見たときに、ある銀行員の、いわゆる超エリートですよ。その子どもさんが、たまたま重い障がいを持っっていた。で、奥さんが、3人目のお子さん産むために病院へ行っっていて、そのご主人と子どもと一緒になっった時に、首を絞めて殺してしまう。結構ですね、そういうことってというのは、たくさんありました。先ほどの、いわゆる青い芝の運動に、やはり、私、触発されて、たまたま本州にいたときに障がい者の通学介助というふうな活動を、ずっと今でもしておりますけれども、象徴的なヒーローがたくさんいましたけれども、そういう先達がいっぱいいてですね、今に僕はつながっていると思っます。

ですから、今ある法律、たくさんできましたよね。しかしながら、残念ながら、実は施設の職員自体が、このがんじがらめの中で、どんどん昔よりやりにくいと。紙切れがいっぱいあっって、これを書くのが大変だとか、そんなことが介護の世界でもたくさんあるんじゃないかと思っるんですけれども。

実はですね、僕自身もできているのかなと思っることがあります。それは、自分の家庭だとか、自分の地域だとか、そういう所でひとつひとつ積み重ねていかなない限り、変わっていかなないんじゃないかと、僕は、それは思っます。ですから、かつての市民運動、私も今、市民運動しておりますけれども、自分のウチの周りは、運動する人が、一体あの人何をやっっているの？というふうに見ていても、あなたの家の周りに私はいるんだよ。あなたとつながっているんだよってそういう活動をやっぱりですね、非常に小さいけれどもしていかなない限り、変わっていかなない。それを、最終的にはつくづく感っじて、今日までこの、相模原の事件は、私の友人たちもみな、もう、言葉を失っってですね、ショックを受けて、どうやっって自分の気持ちを立て直すかっというのを大変な思っをしていますけれども。こんなことがですね、特異なことでも何でもないことだと思っています。あり得ることだと思っています。そういうこととですね、身近な所から変えていかなきゃならぬことと、やっぱりいろいろなハンデがある人が当たり前にいるんだよということと、どうやっってつながっって話をしていかなきゃならぬかということ、自分の頭にはないんですけれども、思っ、今日の話聞かっせていただきました。ありがとうございました。

新田：今のはご感想ということで、よろしいですか。はい、じゃあ、質問とか、いらっしやいませんでしょうか。はい。後ろで学生さん。はい。

会場Bさん：今日はありがとうございました。僕は、臨床心理学科の学生なんですけれども、ちょっと今日、いろいろ話を聞いて、感想になるか質問になるかちょっと、まだまとまらないので、よくわからないんですけど、「聞き合い」ということで、話さっせていただきます。

前に、この人間論特殊講義のゲストで、安積遊歩さんって方がいらっしやっって、その時にも話したんですけど、僕の弟が広汎性発達障害を持っっていて、それでもやっば、僕が、障がいだっって、弟が障がいを持っ

ているって気づいたのも、小学6年生ぐらいになるまで全然知らなかった。普通に接していたんで、あの、なんか、そういう弟のこともあって、今回の相模原事件っていうのは、すごい、非常に大きいものだったのかなって思っただけ。僕の家すごい幸せにやっていたんですけど、そうじゃない家庭もあったりとか、そこから虐待が発生したりする家庭があったりとか、いろいろな家庭があって、その究極系のひとつが、相模原じゃなかったかなと思って。

障がいとか、広く考えていくことっていうのは、やっぱりこれから私たちが、その内なる優生思想と向き合っただけでどうするかって考えなきゃいけないことですよ。多分、ずーっと答え出ないかなーって思っただけです。でも、それでも、その、白か黒かって答になったら、きっと相模原事件のようになってしまうから、今の考え続けるっていうスタイルのまま、生き続けることもひとつなのかなーって、僕は思っただけです。

で、何でそういうふうな考えなのかっていうと、やっぱり比べる、人と比べるっていうのが大きいのかなと思っていて、ここからは僕自身の話しちゃうんですけど、僕が、いろいろな所で中学生の時とか、いろいろやっただけ、そのときに、「ストレスたまるな」って言ったんですよ。そしたら友達に、「いや、おまえみたいなやつがストレスたまるよって言っちゃいけないから」みたいなことを言われて、ああそうなんだって、僕、結構、自分で言うのもなんなんですけど、従順なんです。そこからですね、僕も結構、自分なんてそう思っただけじゃないんだとか、もっとつらい人がいるんだって。さっきデモの人も言った「不幸比べもいい加減にしろ」って言われて、ちょっと目が覚めたんですけど、そういう、他の人の方がもっと大変なんだ、自分はちっぽけだとずっと思っただけ、今まで生きてきたんですよ。

<中略>

僕も、比べるの良くないよと思っただけですけど、そしたら、比べることから離れればいいじゃないかって思うんですけど、なんとなく僕も比べることにこだわっている節があって、比べられるの、すごいやで、前、人に頼って、自分ができない仕事があったから、人に頼ったら、そうやって比べられて、その人すごくできたから、あ、お前なんかやるよりこいつがやった方がいいじゃんみたいに比べられて、すごいイライラしていやになった行為があったんで、人と比べられるとか本当にいやで、敢えて、その場で誰にも言われてないことをやろうとして、やって、そしたら僕ひとりしかやってないことなんだから、誰からも比べられないんです。だから、そうやってほかの人と比べられないように、比べられないように、敢えて自分独自の路線を貫いていったら、いろいろクリエイティブだねと言われるようになったんですけど、そういうことやる癖が僕ついちゃったんですよ。中学校ぐらいから。

で、大学までずっと続いていて、その、だから、例えばアニメとか、本とかでも他の人と、かぶったら比べられるんじゃないかっていうのがあって、ないのに、あって、人に勧められたものとかは、あんまり素直に受け取れないし、流行っているアニメとか本とか、サブカルチャーのものとかいっても、純粋に受け取りづらい人間になってしまって、いやなんか、興味が湧きづらかったりしちゃうなあっていうのもあって、やっぱり比べるっていうのは、僕ら人間にとってすごい大きな問題なのかなって思う。

障がいとか、そういう発想以前にあるんだな、根強くあるんだなーって思っただけ、すごいまとまらなかったんですけど、比べる世間の目とか、なんか周りに左右される社会なのかなーって思っただけ、ちょっと相模原事件から、ちょっと離れていっちゃうんですけど、最終的に僕はそれが、どうにかなんないかなーって思うように思っただけ。ありがとうございました。

雨宮：おもしろい話でした。まず、比較、私も、その比較地獄な感じがとてもつらかったんで、特に20代の頃って、なんか、もう誤差みたいなことで張り合う、5ミリ以内の誤差しかないのに、そこでなにか、持っている物とかで張り合う女子の世界っていう、そういう地獄な感じがとてもいやだったので、これ、比較対象にならないければいいんじゃないかと思って、なんか、誘われたら北朝鮮行ってみたり、イラクも誘われたら、イラク行ったりとか、意見言うところから入ったりとか、そしたらもう圏外だっただけです。それで段々楽に

なったっていうところはあったので、やっぱり圏外になるしか比較地獄からの脱出方法はないというふうに思います。はい。

あと、なんていうのかな、それでもやっぱり今でも、世間的な比較っていうか、数字とか、いろいろなね、競争社会じゃないですか。私は普通に言ったら本の部数だとか、いろいろな売り上げだとか、そういうものに、そういうふうにはさらされるんですよ。それがすごいやっていうか、そっちの価値観だけしかないというので、もう1個の価値観の場所を用意して、あ、これは、いくつかあるんですけど、ひとつ、フリーター労組っていう労働組合に入っているんですね。フリーターでも何でも失業していても入れる組合なんですけど、これ。労働組合なのに労働者があまりなくて、失業者っていうか、ニートとかひきこもりとか働いてない人がたくさんいるんですよ(笑)。そのフリーター労組の中に分会として、キャバ嬢のキャバ嬢によるキャバ嬢のためのキャバクラユニオンっていうのがあるんですけど、そのフリーター労組の価値観で、なんだろうな、ダメな方が偉いみたいな、なんかそんなような価値観なんですね。

で、世の中の的にはだから、正社員で、いっぱい働いていて、過労死しそうで、忙しい自慢している人の方が偉いっていう感じじゃないですか。でも、フリーター労組の中に一步入ると、あんなに働いてバカじゃないかっていうふうに、一生懸命働いている人がバカにされたりする(笑)。なんかもう世の中と逆なんですよね。失業していてもまったく責められない。だから、引きこもりとかニートとか失業者もいっぱいいるんですけど、全然責められないんですよ。普通の場所だと結構、怒られたりするじゃないですか。だけど、ダメでも働けなくても貧乏でも全然OK。私にとってそこは、すごいセーフティネットになっていて、なぜなら私はそういう場所に意図的に軸足を片方置いてないと、たちまち、生産性高い人が価値があるっていう、そういう今の価値観に本当に飲み込まれてしまうので、そんなことは、意図的にやっています。

で、そのフリーター労組とかの運動が掲げているスローガンが、「無条件の生存の肯定」という言葉なんですね。だから、働いていても働いてなくても、役に立とうが役に立たなからうが、とにかく生きていることは無条件に肯定されるべきもので、何かあなたは働いているから役に立ったから生かしてやるっていう、そんなご褒美のようなものでなくて、最初から肯定され得るべきものなんだということを掲げていて、私は、その言葉にすごく救われたというか。自分自身も肯定できなかつたんですよ。それまで。でも、その「無条件の生存の肯定」という言葉を知ってから、自分も肯定できたし、周りも肯定できるし、周りがどんなダメなやつでも肯定できるっていうのは、すごく楽になるというか、そういう、結構、私にとっては大きいきっかけ、なことがあったので、比較っていうことをきっかけに、回答しました。

新田:ありがとうございます。あと、おひとりぐらいでしょうか。はい。

会場Cさん:どうもありがとうございます。今回、札幌学院大学の公開講座で、雨宮処凛さんの名前を見て、これは行かなきゃならないなって、出させていただいて、講座のほうはいろいろ、申し訳ないんですけど玉石混合というか、発表される方もいろいろあり、非常に楽しくあれしたんですけども、先ほど、ちょっと「犠牲の累進性」ということが出ていて、どういうことなのかっていうのは、ちょっと、ああ、なんだ、そういうことなんだということであれしたんですけども、あとは、もちろん、いわゆる人間のね、命の大切さだとか、あるんですけども、ただ、やっぱり、お金のことだけじゃないけれども、やっぱりお金のこともやっぱり考えていかないとならないんですね。お金のいる人は、もうどんな治療でも受けられるっていうのは、やっぱりそれなりに、先ほど、選択肢が限られているということも、あったけれども、それは何かというと世の中で認めるところというか、どこにどういうことにやっぱり、重点的にやるっていうのは、その社会の決め方だと思っている。

多分、全員にすべてなんてできないっていうことは、それは間違いないし、で、学生さんが多いので、あれなんですけれども、今の社会は我々のような老人の方に非常に、いわゆる社会的分配が。それを若い学生さんとかが、本当にこういう分配の仕方でもいいのかっていうことも、もうちょっと考えてもらわないと。まあ、このままいけば当然全部後回し、ツケ、かかるものは全部後回ししている。それは誰の肩に乗るかと言

ったら、今の若い人たちですよ。これから生まれる人にも乗ってくる。

そういう社会として、やっぱり言われているのは、まあ、財政再建という、その部分を考えていかないと、いや、命が大切だとか、何が大切だということばかり考えている。じゃ、そのツケを誰が払うのかっていう部分も言ったらある意味では評価していかないと、なんでもかんでもじゃ、そういう状況は、そういうふうに思います。問題はやっぱりそこ。そこをどう社会として変えるかなんだと思いますけどね。

雨宮：ありがとうございます。本当に、その分配の問題っていうのが、大きな課題で、私も11年間ぐらい貧困の問題でいろいろ訴えているわけですね、国にも。で、こういう所にお金を、貧困対策を、というふうに訴えているんですけども、やっぱり、常に財源がないという言葉が返って来て、ある時から「人の命を財源で語るな」というプラカードで、ずっとデモとかもやっているんですけど、そこは、そればかり言っていてもしようがないので、2年前にですね、反貧困ネットワークの宇都宮健児さんと一緒に、「公正な税制を求める市民連絡会」という会を作って、税の分配について、自分たちから考えていって勉強して提言していこうということで、いろいろ、イギリスからタックスヘイブンの問題に取り組む活動をしている方を呼んだりだとか、そういう活動も始めています。なので、やっぱり財源問題って、どうしてもそこを避けては通れない。それに黙らされてきたのなら、黙らされないように自分たちから建設的な提案を見せないと、っていうことで、そういう活動を始めていますので、ぜひ、ご注目をしていただきたい。

新田：はい、ありがとうございます。ちょうど時間的に終了の時間になりましたので、もっといろいろお話を伺いたいところなんですけれども、そしてまとめのようなことをしようと思ったんですけど、たくさんいろいろな話を受けて、いろいろな形で残るようなアイデアであるとか、問題提起であるとか、たくさん出たのかなと思っています。黙らされてきた、あるいは、黙らされているっていうことを、いろいろな人が自覚をして、言葉にする行為、あるいは、対話をするとか、言葉を聞くとか、そういうような動きを恐れずにしてかなきゃいけないのかなと。私は、今、大学の教員なので、大学の役割っていうものも考えながらずっと伺っていて、主権者としての教育であるとか、有権者としての教育であるとか、あるいは市民としての教育であるとかっていうことを、実は受験のための教育のなかではあんまりしてこなかったのかなと思ったり、あと政治的なことを語り合えるような場っていうようなものが、私の中では今ほとんどなくて、それは教員も政治的なことについて語れないし、語るような、なんていうか、語りにくいようなこともあったりするので、それをもっともっとオープンに共有するような場として、おそらく自由の学府である大学が、やっていかなければいけないのかなと思いつつ聞いていました。はい。

ということで、これをもちまして、人文学部創立40周年記念事業 雨宮処凛さんと、人間の生命と尊厳について考える 対話集会を終了させていただきたいと思います。この後受付横にて、雨宮処凛さんの書籍をご購入の方に、サイン会がございますので、ご希望の方はこの機会にぜひお立ち寄りください。今日は本当にどうもありがとうございました。

(拍手)